

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

サピエンスによる葬送行為を島という視点から探る
＜共同研究：島世界における葬送の人類学：
東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較＞

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2020-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小野, 林太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009496

サピエンスによる葬送行為を 島という視点から探る

文 小野 林太郎

サピエンスによる葬送の人類史をもとめて

アフリカ大陸で誕生した私たち現生人類すなわちホモ・サピエンスは、約5万年前頃までにはアジアやオセアニアの島嶼域への移住を開始したといわれる。一方、人類による葬送行為も私たちホモ・サピエンス以降に活発化し、発展してきたと考えられている。

その萌芽的な痕跡はアフリカ大陸や西アジアで確認されているが、アジア・オセアニアへの島世界へと移住した人類集団も、その初期から墓葬や埋葬行為をおこなっていた痕跡が、各地で発見されつつある。そこで本研究では、人類史的には大陸部で誕生したと考えられる葬送行為や墓葬文化が、島世界という独特な環境への移住後、どのように変容し現在にいたったのかについて、より長期的な時間軸から検討してみたい。いわばサピエンスによる葬送の人類史ともいえる。

島世界における葬送・墓葬文化とその特徴

では、なぜ島世界を対象とするのかについてだが、島という環境の最大の特徴は、四方を海によって囲まれていることにある。もちろん水の惑星である地球では、巨視的にみれば大陸だって海によって囲まれてはいる。しかし島世界では、広大な土地に多様な民族が暮らす大陸世界と異なり、島単位である程度の共通性の高い文化や伝統が形成され、それらが比較的長期にわたり維持される傾向がある。とくに面積の小さい島々や離島においてはその傾向がより強い。一方で、海によって囲まれる島世界では、海を越えた交流ネットワークが発達し、新しい技術や文化が外世界から伝わりやすく、それらが一気に文化や社会に影響を与える傾向も指摘できる。日本も島国だが、日本人の新しいもの好きという一般的な特

徴も、島世界の傾向が多分に影響しているのかもしれない。

いずれにせよ、文化や伝統の継続性は島世界における特徴のひとつであろう。たとえば、本研究が対象地域のひとつとする日本の南西・琉球諸島では、近年にいたるまで風葬や洗骨などの葬送行為が継続されてきた。多くの地域ではすでに廃れてしまったこともあり、琉球独自の葬送というイメージも強いが、風葬のような葬送は人類学的には世界の各地で確認されてきた方法のひとつである。同じく本研究の対象地域となる東南アジアの島嶼部でも民族誌をひも解けば、風葬を含めた二次葬送や二次埋葬は珍しくなかった。今でも東インドネシアの離島部などでは石灰岩の崖や洞窟内に風葬により白骨化した人骨が葬られている（現状では散乱していることが多い）のをよく目にする。

同じような光景は、琉球諸島で一般的にガマと呼ばれる石灰岩洞窟や岩陰でも目にする事ができる。このように洞窟や崖下などを墓域とする葬墓は崖葬墓^{がいのぼ}と呼ばれる。考古学的にも先史時代にさかのぼり、古くからおこなわれてきた葬送のひとつである。そしてこの崖葬墓を伴う葬送が近年まで盛んにおこなわれてきた地域が、東南アジアの東インドネシアや南西・琉球諸島の石灰岩地形が卓越する島々だったのではないだろうか。

このような理解から、本研究ではその対象をアジアからオセアニアの島嶼域に絞った。さらにこの島世界を東南アジア・台湾・日本の南西諸島・オセアニアという4つの地域に分けたうえで、その地域性を人類の島嶼適応や移住といったテーマを軸とする人類史的な視点から検討してみる計画である。

なお時間軸による検討では、アジア・オセアニアにおける現生人類の歴史と重なる5万年程度の幅の長期的な考古学的時間軸と、同時代を含む約100年程度の幅の民族誌的時間

軸を、比較する上での時間的な枠組みとする。この2つの時間軸と、4つの地域に基づく空間軸により、考古学と文化人類学を中心に分野横断的な比較検討を重ねることで、島世界の葬送や墓葬にみられる普遍性、歴史性、地域性を明らかにすることが本共同研究の最終目的である。

構成メンバーと役割分担

さて、そんな本研究のおもな構成メンバ



風葬後に木棺に再葬した例となるスラウェシ島中部の石灰洞窟で出合った木棺（左）と人骨群（右）（2016年9月、スラウェシ中部、小野林太郎撮影）。

小野 林太郎 (おの りんたろう)

国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授。専門は海洋考古学、東南アジア・オセアニア研究。編著書に『海の人類史—東南アジア・オセアニア海域の考古学』（雄山閣 2018年）、『海民の移動誌—西太平洋のネットワーク社会』（共編著、昭和堂 2018年）などがある。

一は、東アジア（琉球・南西諸島）、台湾、東南アジア（おもにインドネシア、フィリピン）、オセアニアの海域世界をフィールドとしてきた人類学者、考古学者、民俗学者からなる。いずれも現地社会における人びとの生業活動や経済活動、海産資源の利用や物質文化を対象とした民族・考古学的調査を、長期のフィールドワークにより実践してきた。各メンバーは、考古学的時間軸か民族誌的時間軸のいずれかに焦点をおき、島世界における葬送についての事例報告または問題提起をし、それを受けて全員で討議をおこなう。

そのおもなテーマや検討事項を紹介すると、まず狩猟採集民研究を専門とし、現代の事例から先史時代までを視野に研究を展開している池谷和信（国立民族学博物館）には、総論的な視点として、狩猟採集民と葬送・葬墓という視点から地域横断的な分析をおこなってもらおう。

一方、考古学的時間軸に関わる検討においては地域別に事例研究の発表とメンバーによる検討を進めていく。このうち東アジアに相当する琉球・南西諸島に関しては、片桐千亜紀（沖縄県立埋蔵文化財センター）が琉球列島における崖葬墓の歴史と他地域との比較について、新里貴之（鹿児島大学）が南西諸島における葬墓制の文化史に関する事例研究を発表予定である。また隣接する台湾については、角南総一郎（元興寺文化財研究所）が先史台湾における葬送や葬墓文化に関する事例を担当する。

東南アジアの島世界については、田中和彦（鶴見大学）が先史フィリピン諸島の埋葬遺跡に関する事例、鈴木朋美（檀原考古学研究所）がベトナム沿岸を軸に先史南シナ海における葬送文化に関する事例を紹介し、小野林太郎（国立民族学博物館）が先史ウォーレシアやサフル大陸における葬墓文化の事例を担当する。さらにその先に広がるオセアニア海域の葬送・葬墓文化については、印東道子（国立民族学博物館）がその多様性を紹介したうえで、片岡修（上智大学）が巨石文化と密接に関わる葬墓制の事例を提供する予定である。

民族誌的時間軸に関わる検討においても地域別の枠組みで進め、東アジア海域では前田一舟（うるま市立海の文化資料館）が琉球諸島における近世期以降の葬送文化、竹中正巳（鹿児島女子短期大学）が南西諸島における先史・近世期の葬送文化に関する研究事例を担当する。台湾については、野林厚志（国立民族学博物館）が近世期以降における台湾の葬送文化を、東南アジアの島世界については秋道智彌（総合地球環

境学研究所）が民族誌事例にみられる葬送文化を島嶼・海洋環境との関係性より論じる。オセアニア海域の事例研究では、後藤明（南山大学）が神話との関わりからおもに民族誌時代以降における葬送文化について論じ、丹羽典生（国立民族学博物館）はおもにメラネシアの事例を中心に現代の葬送文化のあり方について紹介する予定である。

今後の予定と展望

2019年度には、本研究の趣旨と基本的な比較の枠組みや論点の確認を目的とする研究会を2回開催する。このうち1回目は代表である小野による趣旨説明の後、インドネシアを中心とする先史時代における東南アジア島嶼部の事例に関する発表をすでにおこなった。またその比較対象として、東南アジア島嶼部と同様に崖葬墓や風葬が主流となってきた南西・琉球諸島における先史時代の事例を片桐、近世期以降における琉球列島の風葬やその他の葬送について前田が事例紹介をおこなった。

これら共同研究でおこなった検討結果については、次回詳しく紹介する。本研究ではこのように毎回、地域単位で考古学的時間軸と民族誌的時間軸の両方からの事例提供をもらい、そのうえで総合討論を繰り返すスタイルを継続したいと考えている。2回目も同じスタイルでその他の地域を対象に検討をおこない、議論を進めていく予定である。本研究は約2年半の期間でおこなわれるものだが、この期間内に対象とする地域単位の検討を踏まえ、改めて私たち現生人類、すなわちサピエンスによる葬送とその行為に象徴される人類的な特徴、死生観、そして島世界という特殊な環境と葬送・葬墓文化との関連性について、新たな視点や知見の発見を目指していきたい。



宮古島の近世期の崖葬墓（風葬墓）。岩陰を墓とし、遺体を風葬する（2011年3月、長墓・宮古島、片桐千亜紀撮影）。